

繭から糸にする 製糸業

小学校のところに大きなレンガ造りの倉庫があるだろう。

あそこから繭をもらってきて生糸にするのさ。

今は、歴史民俗資料館になってるよ。



旧小幡組製糸レンガ造り倉庫（甘楽町）（甘楽町重要文化財）

養蚕農家の女性が中心となって、各家で座繰りでひいた糸を作業場に集め、品質をそろえて共同販売したのが組合製糸です。

この地区では甘楽社小幡組が組織され、この倉庫は、繭や生糸を保管するために大正15年(1926)に建てられました。



一階奥の部屋と二階の展示室。歴史民俗資料館なので、日本遺産の資料だけでなく、甘楽町の貴重な資料がたくさん展示されています。鎧兜などもあります。



すぐ前には、小幡陣屋の大手門の礎石が残っています。他にも城下町の雰囲気を残す風景がいろいろあります。

近くを流れる「雄川堰」は、環境省の「日本名水百選」や農林水産省の「疏水百選」などに選ばれています。

ここのかかあたちは、誰でもみんな糸をひいてるよ。できた
生糸は小幡組が売ってくれるんさ。かかあたちはみんな昔っから
やってるから、生糸の品質は天下一品だよ。



甘楽社小幡組由来碑 (甘楽町) (甘楽町重要文化財)

明治11年(1878)組合制による生糸揚返し場をつ
くり、小幡精糸会社としてスタートした甘楽社小幡組
の歴史と発展を伝えるため、大正6年(1917)3月に
同組合敷地内に建てられた由来碑です。

この石碑には、「邑ニ養蚕セザルノ家ナク 製糸セ
ザルノ婦ナシ」とあり、地域の養蚕製糸業を女性たち
が牽引してきたことを伝えています。



揚返しをする様子です。「揚返し」とは、
生糸を取扱いに便利な罫(かせ)にする
ため、大枠に巻返す作業のことです。

(「群馬県立日本絹の里」所蔵)

〔「小幡組由来碑」現代語訳〕

昔の人が言うように成功するには必ず理由がある。

明治維新で海外貿易が開かれ養蚕製糸業が始まった。明治十一年、村の先進的な人は、世の動きをよく知り仲間と相談して、小幡精糸会社と尾上精糸会社に生糸揚返し場を造る。明治十三年、双方とも甘楽社の支部となる。

これより村に養蚕をしない家はなく、製糸をしない女性もいなかった。両支部に合併の話が起り賛同を得て明治三十年甘楽社小幡組となる。規模を広げ産出額も増して糸はさらに良質になった。明治四十三年、産業組合法により組織基礎を固め、大正二年有限責任信用生産販売組合甘楽社小幡組となる。工場及び機械の改善は評価を上げ繰車札の音がしない日はなかった。組合員は七百十人で、一年間の糸量は二千八百貫その価格は二十二万円になった。上州南三社中で第一となったのは、先進的な人が未来のことを考えて始めたことを後に続く人がよく守ったことによるものである。そして組合員が相談して、そのいわれを消え去ることのない碑に表わすため文にして残すものとする。

(日本遺産「甘楽社小幡組由来碑」説明板より)

世界遺産になった富岡製糸場なんかじゃ大きな機械で繭から

糸をひいてるけど、私たちや“座繰り”という方法で糸をひくんさね。



*一般的に糸は「紡(つむ)ぐ」と言いますが、生糸の場合には「挽(ひ)く、繰(くる)」と言います。

甘楽町の養蚕・製糸・織物資料 (甘楽町)

大正期には約7割の世帯が養蚕農家だった
甘楽町で使用された養蚕・製糸・織物に関する
道具や資料333点です。

甘楽町歴史民俗資料館に収蔵・展示されて
います。



「座繰り」
糸枠に糸を巻く
器具です。



座繰りをする様子です。
(「群馬県立日本絹の里」所蔵)



繭の量をはかる升です。
紙製で軽くて、小さく折り
たためます。



繭を入れた袋です。



上は「糸巻き機」。
下は「管巻車(糸車)」。

